

### 1 自己評価及び第三者評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2875001501		
法人名	医療法人社団 恕和会		
事業所名	カルム箕谷		
所在地	神戸市北区山田町下谷上字かんじゃ7番3号		
自己評価作成日	平成22年12月20日	評価結果市町村受理日	2011年2月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.hyogo-kaigo.com/">http://www.hyogo-kaigo.com/</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉市民ネット・川西
所在地	兵庫県川西市中央町8-8-104
訪問調査日	2011年 1月 14日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

<p>①入居者さまが自宅で生活された時と、同じように過していただいたく事を重点におき、安心・安全の確保ニーズにあったゆったりとした生活を提供します。</p> <p>②季節行事、買物やドライブ、畑仕事・園芸、地域行事への参加、お誕生日会、ボランティアの利用など、多彩に取り入れています。また、併設するデイサービスと連携して合同アクティビティの実施も積極的に行っています。</p> <p>③個々に合わせた生活パターンで穏やかに過されるよう気遣うと同時に、笑いのある会話でスタッフが親しくお付き合い致します。</p> <p>④経営母体の松田病院との連携、併設する訪問看護ステーションとの連携により、入居者さまの健康維持を全面的にバックアップします。</p>
---

**【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

<p>事業所は、新神戸トンネルを出た交通量の多い街道沿いに位置しているが、敷地が広いので内部は騒音も気にならず、落ち着いた雰囲気である。理事長が長年地域医療に関わり、地域住民にも事業所の存在は周知されている。法人で開催する「なごみ寄席」には毎年地域住民が多数参加し、利用者も楽しいひと時を過ごした。設立6年が過ぎ、利用者の高齢化に伴い日常生活動作は低下しているが、母体が医療法人であり、医療的には利用者や家族に対して安心の体制となり、職員の介護体制にも自信と信頼を与えている。今年度は主任クラスの複数の職員の交代があり、家族から不安感が伝えられたが、後を引き継いだ職員同士が心を合わせサービス向上に向け努力している。食事時間も和やかで利用者は笑顔で会話されていた。</p>
--

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	カム箕谷の理念として、「地域住民との交流を積極的に行なう」ことを重視している。理念をベースにしたユニットミーティングを行い、近所のお店からの紹介や地域のボランティアセンターからのボランティア(フラダンス、大正琴等)との交流を図っている。	利用者が、地域住民として自分らしく過ごせるための支援を理念としているが、職員には月1回のユニットミーティングで意識づけを図り、実践に結び付けられるよう努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年6月の恒例の「なごみ寄席」では、年々増えている近隣の住民の来場者の方々にブローの囃子による落語を楽しんでもらった。また、地域の自治会主催の盆踊りへ参加したり、地域のボランティアに来てもらっている。	毎年恒例の「なごみ寄席」には、今年も多数の地域住民の参加があり、歌の時間には利用者も一緒に楽しんだ。また、理事長が認知症の講演を行うなど、地域との交流が定着している。	事業所が持つ認知症ケアの知識と介護技術を、住民対象の集会で提供し、地域高齢者の暮らしに役立つ活動を展開されてはいかがか。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	6月開催の「なごみ寄席」の第1部で「脳を守る」と題し、理事長(松田病院院長)による認知症に関する講演を行い、地域の入居者の方々の関心を集めた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、入居者の近況・事業所概況を毎回報告し、毎回タイムリーなテーマを取り上げ様々な意見を参考にし、実際の運営に反映し改善している。 (過去に意見拝聴したテーマ) ①職員資質向上 ②食事の改善 ③園芸療法(庭・畑)の今後 等	利用者、家族、自治会長、地区代表、地域包括支援センター、民生委員等が出席し、2ヶ月に1回開催。利用者の近況や行事報告を行い、検討された事項は運営に活かすよう努めている。今年は急な職員の退職があり、利用者や家族が不安をかかえたが、運営推進会議の協力を仰ぎながらサービス向上を目指すという積極的な姿勢が見られた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から疑問や不明なことがあれば問い合わせしている。今年はデイサービスの休止や外部評価の緩和措置等についても多く問い合わせをし適切な指導・指摘を頂いた。	日常的に市担当課に相談や問い合わせを行い、関係性を保っている。利用者の相互関係性悪化に伴い、認知症デイサービスがやむなく休止にいたったが、その都度出向いて相談した結果、市担当課からは助言と指導があった。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中はホームの出入り口は、夜の8時半より翌朝8時までは、防犯のため電子ロックをかけているが、日中は解除している。また、居室の窓やドアは閉め切りにせず、開け閉めは入居者の自由としている。	利用者が不穏の状態の時はやむを得ず施錠することがあるが、職員は身体拘束に関する意識もっている。言葉かけもお互いに注意し合い心に寄り添うケアを心がけている。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	神戸市認知症介護実践者研修で虐待の講義及び兵庫県看護協会主催の虐待・身体拘束についての研修に計画作成担当者が受講しており、プラン作成におり込んでいる。	市主催の虐待に関する研修会を介護計画作成担当者が受講し、職員に伝達研修を行った。さらに内部勉強会を開きたいと考えている。	
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	いつでも成年後見制度等に活用できるよう、継続して神戸市認知症介護実践者研修で虐待の講義及び兵庫県看護協会主催の「介護サービス従事者等権利擁護推進研修」などを計画作成担当者が受講しており、プラン作成におり込んでいる。	外部研修会に参加した職員が内部勉強会で仕組み等を説明した。利用者個々の人権を守るべく、職員全員で研鑽を積みたいと考えている。	家族会など機会があるごとに、家族が権利擁護に関する知識と理解を得られるような情報発信をし、連携のもと事業所として関係機関へ橋渡しができるような活動をされてはいいか。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	仮申し込み(空室待ち)および入居申し込み時、契約の内容および重要事項説明書について、十分に時間をかけ説明している。解約時についても、家族の方々に了承を得るよう話し合いをおこなっている	契約前に見学をすすめ、事業所の雰囲気を理解した上での納得の利用につなげている。また自宅訪問をし、利用者の生活環境や得意なことなどの情報を収集し、利用者理解を深めたくて援助内容を検討している。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	重要事項説明書に当ホームおよび外部機関の苦情相談窓口を明示し入居時に説明している。又、年2回の「家族会」で家族の方から意見・要望を聞いている。運営推進会議(2ヵ月毎)においても入居者代表に意見・要望を聞き、ホーム運営に反映している。	年2回の家族会では積極的な意見が出る。一時に複数の職員が退職し、家族が不安感を抱えたが、一つひとつを真摯に受け止め、サービス向上のために活かせるよう努めている。また家族来訪時には個別に意見などを聞いている。	複数の職員の退職は施設にとっては大きな出来事であったが、残された職員が一丸となってサービス向上に取り込もうとする意欲が伺えた。原点に立ち戻り、新たな視点で一致協力されることを応援していきたい。
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	リーダー、所長、事務長による月次ミーティングやユニット別月次ミーティング、介護計画作成におけるカンファレンスの場で介護スタッフの意見や提案を出し合っている。	「職員の笑顔は利用者の笑顔である」ことをモットーに、管理者が職員から意見等を聞き取っている。職員提案でアクティビティプログラムが増えサービス向上につながった。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	所長は、毎日介護現場に出向き入居者さんと接しながら職員の仕事振りを観察している。勤怠確認も月初行い日ごろの観察から個人別に正当な評価を行い昇給・賞与時の査定に反映している。また、有給休暇も制限せずむしろ奨励し、夜勤明けの次の日は休日としている。残業もほとんど無い。正職は月少なくとも8日の休日が確保できている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護研修 実践者研修は、全職員を対象に受講するよう考えている。業務に支障のない範囲で、順次計画的にやっている。また、無資格者に対しても、介護における基本的な技術講習を受けさせたり認知症介護の研修ビデオで学習している。また、介護経験の無いか浅い職員を中心に、生活場面における介護者の対応例を比較し、好ましかかわりを解説した、DVD「認知症の人と一緒に生きる」をみている。新人には、全シフト(4交替)を経験させる際も、リーダーを中心とした先輩職員によるOJTを行っている。		
14	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣の設立して長年が経つ他のグループホームとは、懇意にしており、計画作成担当者間で交流を持ったり、運営推進会議委員に認知症の知見者として当ホームのケアマネが加わるなどつながりを持っている。また、神戸市介護サービス協会やあんしんすこやかセンター主催の研修・地域会などに参加し、グループワークを通じても交流を図っている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>				
15	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	グループホーム管理システムのプロフィール(過去の仕事、趣味、特技、性格、既往歴、家族構成等を本人や家族に聞き)をシステム入力している。また、24時間途切れることなく「ケース記録」入力により入居者さんの行動や話したことは、記録し職員間で共有している。これらの情報を頭におき入居者の行動を拘束しないよう根気よく対応している。言葉使いもタメ口をきかないよう指導している。		
16	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族は入居される前に、いろいろなグループホームに行き本人を預けて心配ないか確認されて入居されている。その際や、見学にこられた時など当ホームの理念・特色など説明し、十分に納得され入所されている。また、入所後も面会は、24時間いつでも可能にし、気楽にお話しできるように職員にも指導している。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時、入念に家族から今までの生活様式、生活習慣などからの要望や注意事項等を聞き、それに応えるよう介護計画作成に努めている。また、計画どおり実行されているかチェックを怠らないようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ホームのレイアウトは、中央に台所とスタッフルームを配置し、ダイニング・リビングがその隣にある為、ほとんどの間をリビングで過ごされている入居者を見守れかつお話しができる。盛り付け、配膳、下膳を手伝ってもらったり、イモ掘りしたり、1人の入居者の歌に合わせて体操をしたり、テレビを見ながらお話ししたりごく自然な形で職員と入居者が毎日過ごしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者に異変があれば、必ず家族に連絡している。また、家族も面会時などに気楽に相談されるし、入居者本人にとっていい方向に持っていくよう一緒に考えて対応している。又、退居時多くの家族の方から不要となった物品を寄付していただいたりもしている		
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔商売していた商店街や思い出深い湊川神社に行きたいと言われれば、事務課の職員の協力を得て、また、OFFの職員がボランティアとして出かけたりもしている。また、お友達が尋ねて来られることも多々あるが、昼夜を問わず気持ちよく迎えている。	利用者の意向に関しては、日常の関わりの中で職員の気づきや利用者の言葉を記入し、職員が共有している。家族の協力もあり、利用者のこれまでの馴染みの関係継続の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ほとんどの時間をリビングで過ごされるので、入居者同士の言動が目や顔にわかり、馬の合う人、合わない人など職員が知り尽くしており、入居者の関係が一時的に悪くなくても、すぐに職員がフォローできる体制にある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	開設以来13名の方が退居されたが、過去から通して、車椅子、テーブルイス、ポータブルトイレなどを寄付していただいたり、以前亡くなった家族の方からは、料理屋を閉店するので、要らなくなった食器や冷蔵庫など沢山寄付していただいた。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お花が好きな方、散歩が好きな方、畑仕事ができる方、餡が好きな方、歌が好きな方、様々であるが、共通で喜ばれるのは、外出である。計画的に、花見、地元自治会の盆踊り、ぶどう狩り、いちご狩りなどに行き、畑仕事(種植え、芋ほり)、外食(回転寿司)、紅葉ドライブなど年間を通して行っている。また、テラスでのひなたぼっこ、コンビニへ餡などの買い物、音楽療法も日常的に実施している。	意向を表明しにくい利用者に対しては、表情やしぐさから思い測り、家族にも相談してその人らしく過ごせることができるよう援助している。利用者の意向を尊重し、できる限り喜ばれる外出支援を行っている。寝たきりの要介護5の利用者に、好きな音楽のCDを聞いてもらったところ、笑顔が出て表情が豊かになったことがある。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	グループホーム管理システムのプロフィール(過去の仕事、趣味、特技、性格、既往歴、家族構成等)を本人や家族に聞きシステム入力している。また、24時間途切れることなく「ケース記録」の入力により入居者さんの言動は、逐一記録し職員間で共有している。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	グループホーム管理システムの「ケース記録」で入居者の過ごされている様子をほとんど切れ目なく入力している。また、朝には、バイタルを計り、月1回体重測定もおこなっている。このような情報や職員からの申し送りによる情報をかみ合わせ最新の入居者状況を把握している。			
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者の毎日の行動は、グループホーム管理システムの「ケース記録」の情報や職員の持っている情報や思いをもとにアセスメントを行い、カンファレンスを開き、また、家族からの要望や意見など日頃から聞いていること、及び「家族会」や「運営推進会議」での意見や要望を反映した介護計画を作成している。	職員は日常的に気づいたことをケース記録に書きとめ、検討会等で共有を図り、利用者個々の人生に寄り添うことを目標として計画原案を作成している。さらに利用者や家族と検討し、かかりつけ医の助言も参考にし、現状に即した介護計画となるよう努めている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者の言動は、グループホーム管理システムの「ケース記録」に入力している。また、職員間で、気付いたことや今までと違う対応をカンファレンスの場で話し合い計画作成担当者の作成する介護計画に反映している。			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28			○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者は同設するサービス事業所で実施している尺八演奏の鑑賞や映画鑑賞などのアクティビティを希望によりサービス利用者と一緒に受けることができる。また、入居者が近くのコンビニやスーパーに行きたいと言われたらスタッフが同行している。病状は安定しているが、入居者本人が入院を希望されたケースでは連携の病院に無理をお願いして入院させてもらうなど、入居者および家族の方のニーズにあったケアに努めている。		
29			○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者自身から、要望はあまりないが、地域社会との交流を目的に、自治会の盆踊り(お寺)に参加したり、神社のお祭りや、子供歌舞伎などに参加させてもらっている。また、地域のボランティアセンターを通し腹話術のボランティアに来てもらっている。		
30	(14)		○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	遠方のかかりつけの病院を望まれる入居者には、家族同伴でいってもらっている。また、月2回連携の病院から往診にきてもらい健康管理に努めている。その他の病院診察が必要な場合、すぐ近くの連携病院に家族が同伴して診察を受けている。	本人、家族が同意、納得のもと全員、法人かかりつけ医となっている。月2回、連携の病院から往診に来てもらい、健康状態を把握している。他科受診希望される場合は家族が同伴して受診。受診結果は家族から事業所へ報告し、状況把握ができています。	
31			○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療系の介護施設として、看護師が多く在籍している。所長が看護師資格を持っており、かつ同じ施設内に訪問看護ステーションもあり、24時間体制で緊急時対応が可能としている。		
32	(15)		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	連携の病院に入院するケースが多く、当施設の看護師のほとんどがその病院から異動している。病院の院長をはじめ医師や外来・病棟看護師ともに親しい間柄で入退院なども、当ホームの要望を聞き入れてもらっている。	日常の状態把握の徹底と変化の予測、かかりつけ医、利用者家族とも情報交換できている。早期退院に向けた担当医、看護師との情報交換も密に行い、当ホームの要望も聞き入れてもらい、関係作りに努めている。	
33	(16)		○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアなどについては、全家族に話しをして、どのようにしたいかなど確認している。昨年7月の「家族会」では、「医療連携体制における具体的なサービス」および「重度化した場合の対応に係わる指針」を家族に対し、説明し再確認した。	状態の変化に応じて、家族、主治医を交えた話し合いを早めに行い、利用者、家族の意向に添えるように取り組んでいる。事業所が対応できるケアについての説明、資料を家族会に提供し、働きかけており、今までにターミナルは何度か経験している。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	昨年、吸引器についての技術指導訓練を行った。AEDの使用方法は、3年前に購入時に研修会を開いたが、以降は実施していない。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回(12月・6月)に主に夜間想定で、発火ー現場確認ー初期消火ー避難アナウンスー警報アナウンスストップー消防署状況説明ー避難の一連の訓練を実施している。地域ぐるみでの具体的な防災体制までには至っていない。	避難訓練として2回予定していたが、1回の実施。消防署からの指示でとにかくベランダまで出る事とし、避難経路も訓練を通して整備されている。地域住民の参加は得られていない。	実際の避難訓練に近隣の住民の協力をあおいではいかがか。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日常のケアや勉強会などでリーダー・所長が言葉づかいやプライバシーなど指導している。広報誌の掲載写真なども本人・家族の了承を得ている。職員の入職時に、個人情報保護についての説明を行い周知している。例えばターミナルケアの入居者には、リビングのコーナでおむつ交換などの際には、カーテンで見えないように配慮している。「行動指針」にも尊厳を守ることが明示し現場に掲示している。	尊重とプライバシー確保については勉強会などで、しっかり、呼び方、声かけの仕方など指導されている。職員の入職時は、個人情報保護についても説明を行い配慮している。ターミナルケア時は常に目が離せないこともあり、特に細かい配慮に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	手芸がしたいと言われたらマフラー作りをしたり、昔の映画を見たいと言われるビデオを探して皆さんで見たり、また、アクティビティの際も、どんな歌を歌いましょうかなど入居者の気持ちを聞き、心の中にあるものを引出すよう声掛けの基本として疑問形で語りかけ自己決定を促している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床、就眠など入居者個々人のペースに合わせている。また、行事の際には、事前に内容のおしらせをし、急がせず慌てず協力していただいている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月毎に理美容師が来所し、整髪している。今の入居者にはいないが行きつけを要望された家族が同伴していただく。また、外出時には皆さん一張羅に着替え、余所行きの格好でお出かけしている。		



自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(19) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	昼・夕食はデイサービスの厨房で調理したものの盛り付けを手伝ってもらい、かつ、配膳、下膳なども入居者にいただいている。又、米とぎや巻きずしなど作ってもらっている。献立、味については月1回「給食改善会議」を開き、業者の栄養士や調理士に入居者の好みや、季節に応じて記念品や祝日に合わせた献立をお願いしている。	食事の配下膳は、利用者が手伝って一緒にしている。月1回、給食改善会議を持ち、現在利用者の好みの味になっている。好みのメニュー提供で、たこ焼き、お好み焼きも作ったり、10時のおやつにはむしパンを作ったり、職員と一緒に調理する楽しみの支援がある。	
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	4月より昼食、夕食の調理は業者に委託している。月1回「給食改善会議」を開き、業者窓口担当、栄養士、調理人に対し、問題点の提示や要望を出している。糖尿等の持病を持つ入居者のため管理栄養士の資格を持つスタッフが献立表を作れる環境を検討している。水分確保は、所長(看護師)が、臨機応変に職員に適量(目安として1日1,400cc)を指示しており、不足している入居者には医師に相談し点滴を行い補っている。		
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝昼夜食事30分以内にうがい、ブラッシングを欠かさず行っている。加えて夜は義歯について洗浄剤を使って洗っている。また、食事前には口腔ケア機能訓練を行っている。月1回協力歯科医院に往診を受けており口腔ケアの要領、注意点などの指導を医師、歯科衛生士から受けている。		
43	(20) ○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	2時間毎にトイレ誘導を基本とし、夜にオムツをしている入居者も日中は、リハビリパンツやパットを使用して訴えや様子を見てトイレ誘導している。失禁されるとその様子から見分けられるので、トイレに行くように声をかえ誘導し介助をしている。また、排泄後には丁寧に陰洗を行っている。	排泄パターンや訴えの様子に応じた適切なトイレ誘導は、排泄の自立に結びついている。居室から近いトイレに利用者の障害に応じて、名前の書き込まれた小さな箱に、パットが用意され、手の届く高さに取り付ける等、自立を促す配慮がしてある。	
44	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入居者の体調維持・ストレス解消のため男性の入居者の歌(北国の春)に合わせ朝の体操を欠かさず行っている。グループホーム管理システムの「ケース記録」で入力された排便の状態と量を確認し、食事に食物繊維(レタス、ごぼう、バナナ等)を取り入れる等心がけている。また、整腸のため主食の他にヨーグルトやヤクルトを付けている。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は時間に自由度を持たせ9時～17時の間で基本的に入居者の入りたい時にしている。毎日入りたい人は毎日入浴し、そうでない人は、本人のペースに合わせているが少なくとも週2回入浴するようにしている。また、柚子湯・カン湯・菖蒲湯などでお風呂を楽しんでもらっている。	入浴は10時～17時、利用者の希望に合わせた日時で入浴している。洗髪だけの介助や、手浴、足浴もあり、又柚子湯、菖蒲湯など季節を味わえる入浴の支援もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	朝の軽い体操、買い物等でできるだけ体を動かすことを日課とし、自然な生活リズムの中で安眠策を取っている。寝つきの悪い入居者には、スタッフルームで、もしくは冬の時期、コタツに入り温かい飲み物を飲みながらお話しをして気を落ち着かせている。薬にははでるだけ頼らないようにしている。また、寝る前に足湯をしたりして眠りやすい工夫もしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人別に、処方された服薬表をもとに入居者個別(薬箱)に朝・昼・夜に分けて管理しており、服用前には、職員の2重チェックにより分袋し、かつ、入居者の確認をとり、服用してもらい、服用後は、服用担当者が捺印して、漏れや間違いを起さない配慮をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者には、食事の料理の手伝いや、配膳・下膳、畑仕事(植ええ、収穫など)、居室の清掃、廊下・階段の掃除、洗濯物の片付けなど得意なことや好きなことで役割を持っている。毎朝、朝の体操では、「北国の春」の曲でホール担当の入居者を中心に実施している。なごみ寄席(イベント)では、入居者の出番を作り、美空ひばりの「真っ赤な太陽」と、千昌夫の「北国の春」、'おもちゃのチャチャチャ'で「リハビリ体操」をステージの上で演じてもらった。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	天気のよい日に庭でひなたぼっこや散歩をしたり、外食(回転寿司)を楽しんだり、畑仕事や、コンビニへ買い物なども都度行っている。	天気のよい日は散歩や花つみ、テラスで日なたぼっこを楽しんでいる。外出は初詣・花見・菊茶会など毎月計画された行事や、家族と共に食事、帰宅等、普段行けないような場所にも出かけている。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	建前としては、施設ではお金は預からないが財布を持たないと落ち着かない入居者には、持ってもらっている。小銭のお金を(2,3千円)小遣いとしてコンビニで買い物を楽しみとしている入居者もおられ、必要な医療費や日用品代は施設で立て替えて購入し、領収書を付けて家族に請求している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が電話をしたくても掛けれない時は、相手につなげてあげている。また、月に何通か手紙を出したいといわれれば、事務課に行き切手を譲ってもらうなどお手伝いするようにしている。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	①廊下は回廊型で見当識障害に対応しており、居間と食堂と台所が一体となった家庭的な作りになっている。 ②トイレも普通の家庭と同じように居室の中ではなく、居室のすぐ近くに設置している。 ③施設玄関が道路から奥まっている為、施設入り口付近に事業所名が入った目立つ案内板を設置している。 ④施設周りと玄関付近には、葉ボタン、パンジー、つつじなど四季にそった花木を植え、親しみやすさと入り易さを表現している。	共用の空間としての廊下は、とても広く明るく、少人数で過ごせる椅子も設置され、季節の花がある。利用者の手作りの作品を飾ったりして、季節感ある工夫もし、居心地良くしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下の一歩端の落ち着ける場所に2~3人掛けのチェアを設置しており、実際に気のあった入居者が利用しておられる。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベッド・チェスト・エアコン・空気換気機は、備え付けだが、テレビ・収納箱・仏壇など好みのものを持ち込み、衣類関係も今まで使っていたものを自由に置けるようにしている。又、家族の写真・思い出の品など飾り、個人個人に馴染んだ居室になっている。	居室はゆったりとした広さで、その人らしい生活に必要な小物を中心に、家族の写真や馴染みの物の持ち込みがある。又各部屋の入り口には表札と、その下に数枚の家族や孫との写真が貼られ、ほのぼのとした雰囲気がある。その人その人に馴染んだ居室になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者のやりたいことをしてもらっている。掃除機かけ、洗濯、食器洗いなど、すこしムリでないかと思ってもやってもらい、そばで転倒しないよう見守ったり、あとで、本人に気付かれないように、フォローしている。		